山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　研究紀要10　1994年　pp73～78

山梨県東八代郡中道町金沢出土の土師器瓹について

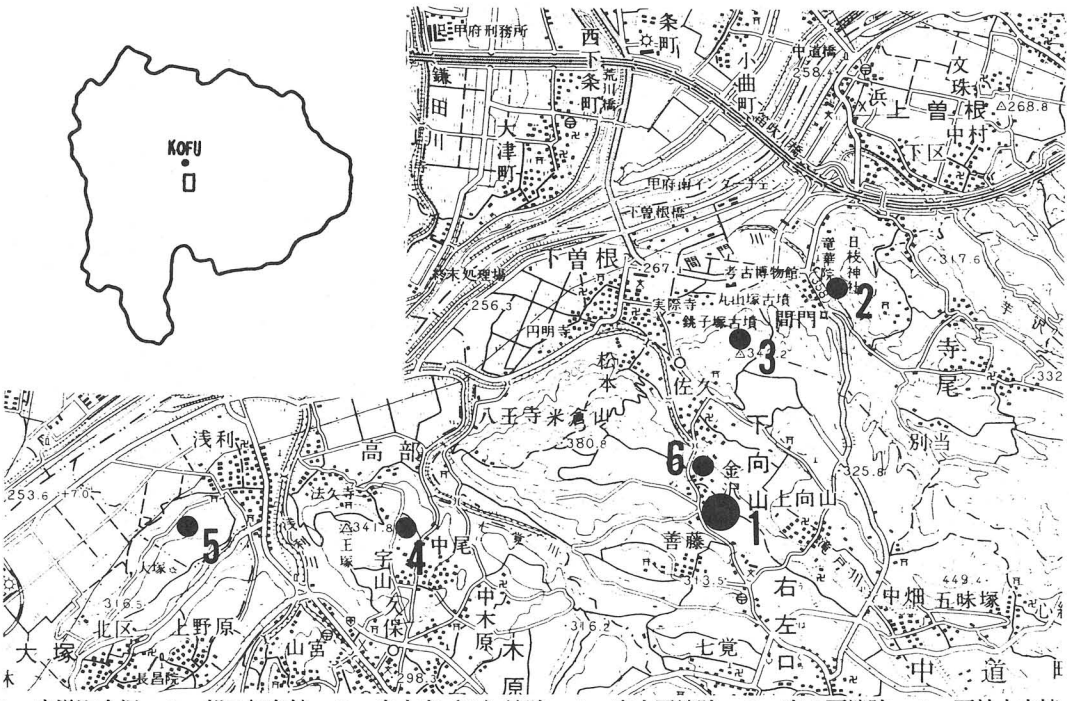
高　橋　みゆき

1　はじめに
2　研究略史
3　遺物と瓹出土遺跡
4　考察
5　おわりに

1　はじめに

山梨県では、古墳時代中期に属する遺跡の調査例が少なく、その資料の希薄さから他の時代に比べ研究が滞っているのが現状である。実際、遺物の集成を行うとき、本県は長い間空白地帯となっていた。しかし、最近の発掘調査で資料が増加しており、各方面での整理作業も進んでいる。これらが報告されれば、空白だった県内の古墳時代中期の様相が見えはじめることであろう。

今回紹介する資料は、東八代郡中道町金沢で発見された古墳時代の土師器小型壺と土師器瓹である。この２つの土器は、現在では石材置場となっている小林慶悟氏の所有地から、土を搬



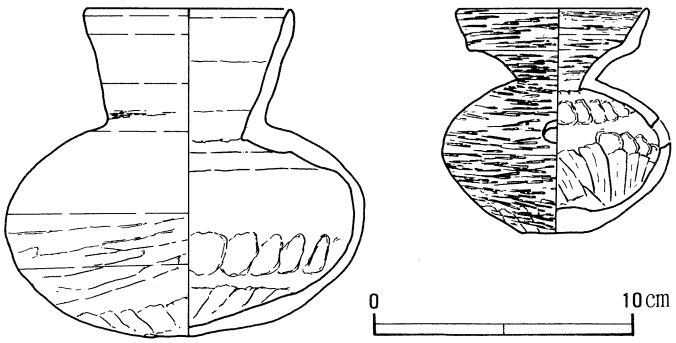
1．中道町金沢　2．朝日無名墳　3．東山南（B）遺跡　4．宇山平遺跡　5．宮の下遺跡　6．天神山古墳

第１図　遺物出土地点位置図

出する際に発見されたものである。残念ながら、これらの土器以外には遺物は残っておらず、遺構の存在も明らかではない。しかし、発見されたのが比較的新しく、出土地点もはっきりしているため貴重な資料といえる。幸い、単独の出土ではなく2個体が共伴していることから、その所属する器種の中で、各々を検討することによって時期を明らかにすることができる。そこで、今回は、須恵器の編年をもとに、県内の瓶についてのみ資料の集成を行い、検討してみようと思う。

2　研究略史

山梨県における古墳時代研究は、古墳の石室やそこから発見された遺物を紹介することを中心に早くから行われている。古墳時代と名が示すとおり、この時代は古墳という最大の構築物が注目され、その石室中には豊富な副葬品が納められていたこともあって研究者以外にもその存在は広く知られていた。しかし、このために盗掘や開墾にあい多くの古墳がその姿を消していったのである。このような状況のなか、県内の古墳時代土器研究は始まったのである。当初の研究では、学術雑誌や市町村誌に出土地や、その遺物の観察を記載することが多く、それ以上の検討がなされる事は少なかった。もちろん、発掘して得られる一括資料に恵まれなかったことにも一因はあるが、少ない資料で遺物の集成や編年を試みることはとても困難なものであった。しかし、1970年代以降から中央自動車道の開発に伴った大規模な発掘調査が行われ、遺構に伴う一括資料を得ることができた。これらの遺物の整理・報告を通して、今まで試みられなかった土器の編年作業が注目され始め、徐々にその成果をあげてきた。県内の古墳時代土器研究における本格的な編年案は、末木・坂本両氏によって行われ[1]、県内出土の弥生時代後半から古墳時代全般にかけて各遺跡単位で組まれた。金沢出土土器が属する5世紀代の資料として、この中では、塩山市西田、御坂町二之宮・姥塚の3遺跡をとりあげている。この編年が組まれた時には、二之宮・姥塚遺跡の整理が途中であり、時期の細分も不完全なものであったと思われるが、県内の遺跡を総括している点で、現在でも基礎資料として使われている。この後、二之宮[2]・姥塚遺跡[3]の報告書が相次いで刊行され、時期の細分化が進み、それに合わせた調査報告が数多く出されている。しかし、各遺跡ごとには遺物の検討を行っているものの、全体を通した編年までには至っていない。本県においては、古墳の位置づけや、古墳出現期の様相、更には奈良・平安時代の土器様相が盛んに研究されている状況のなか、古墳時代中期から後期にかけての限られた部分では研究が滞っている。このため、この時期の遺物の集成や遺跡の分布状態を



第2図　出土遺物実測図

把握することは、空白部分を補って古墳時代の様相を明確にさせるためにも、急務であるとおもわれる。

3　遺物と瑳出土遺跡

今回報告する資料は、古墳時代中期後半に位置づけられる土師器小型壺と瑳である。ここでは、遺物の観察をおこない、県内で瑳を出土している遺跡について少し触れておこうと思う。

土師器瑳は、口頸 7.4cm、口頸基部径 3.1cm、体部最大径 8.8cm、器高 8.9cm。口頸部は細い基部から外反して立ち上がり、中段で屈折して稜をもつ。口縁端部はやや丸みを欠く。体部の最大径は体部の1／2以上にあり、外面外上から斜めに円形の穿孔１つ。成形は、体部下半を丁寧に全面ヘラ削りした後、皮などで全面になでを施している。内面に指頭圧痕がみられることから、粘土紐積み上げ成形とおもわれる。調整は、成形後に横方向の細い磨きを全面に施しており、焼成も良い。底部はヘラ削りでやや平底を呈す。

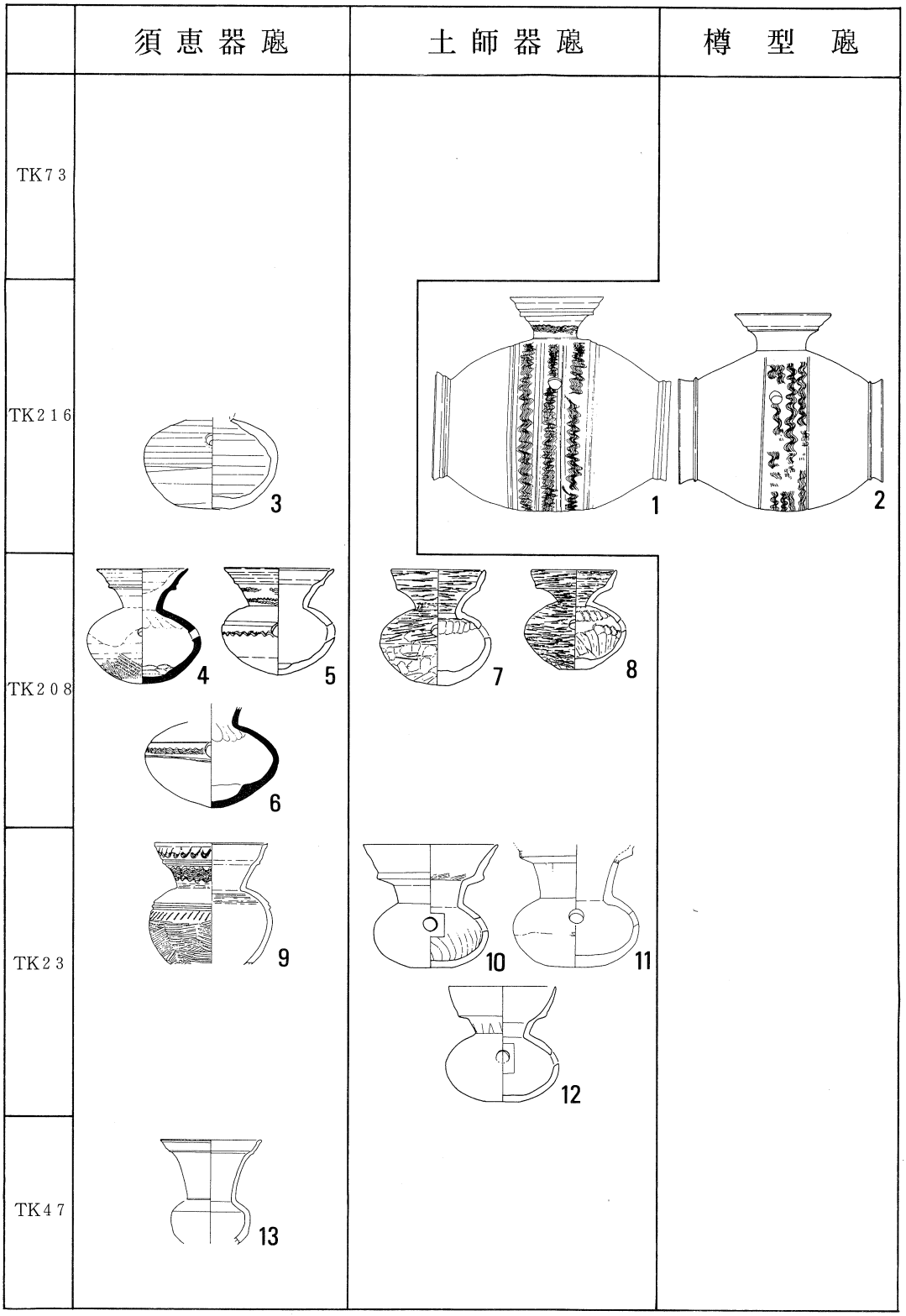
小型壺は、口径 8.2cm、体部最大径14.1cm、器高12.6cmを測る。頸部から直に立ち上がる口縁をもつ。体部の最大径は体部の1／2前後にある。口径に対して体部がかなりはり、つぶれた偏平な楕円形を呈す。口頸基部から口縁端部までが比較的短い。調整は瑳と似ており、ヘラ削りで成形したあと全面をナデ調整し、最後に横方向の磨きを行っている。

この２つの土器は、県内では出土例が少なく、特に小型壺は、一宮町大原遺跡[4]の祭祀遺構から出土した小型壺以外、今のところ該当する器形が見当たらない。大原遺跡の祭祀遺構からは、土師器各種と一緒に手捏くね土器と滑石製模造品がたくさん出土しており、古墳時代中期後半の遺跡の特徴をよく示している。金沢出土の２つの土器は、破砕された後に火を受けたようで、黒く煤けた部分の接合面が一致しない。また、小型壺の器形が稀なことからも祭祀に係わるものの可能性もあると推測される。

次に、土師器瑳を出土している遺跡についてだが、中道町出土を含め５遺跡を数える。御坂町二之宮遺跡では、1980から1982年にかけて調査され中期後半の住居跡が12軒検出され、その内の西71号住居跡から完形品と口縁部の破片が確認されている。この住居跡では須恵器瑳も出土しており、県内では唯一の須恵器瑳と土師器瑳が共伴する資料である。また、グリッドからも完形に近いものがある。御坂町姥塚遺跡では、1981から1983年に調査がおこなわれ、古墳時代中期後半に属する２件の住居跡が検出されている。瑳は古墳時代前期後半から中頃に主体をもつ５号溝から出土している。この他、古墳からの瑳出土例としては中道町天神山古墳[5]と一宮町都塚古墳[6]がある。天神山古墳は、県内の古墳の中で数少ない未調査の前方後円墳であるが、『中道町史』によれば、前方部近くのくびれ部葺石中から土師器瑳が出土したこととなっている。一宮町都塚は金原古墳群の１つで現在は確認できない。

4　考　察

1984年以来、古墳時代中期以降の土師器は、資料が増加しつつも手つかずのまま現在に至っている。今回、偶然にも中期後半という県内でも最も資料の少ない時期の土器を託され、少しでも、こ



第3図　古墳時代中期瓹編年図

れからの研究の足掛かりとなるよう編年を試みようと思う。今回は、古墳時代中期後半を中心に、陶邑編年[7]のＴＫ73からＴＫ47の５型式に相当する瓹に限り編年組みを行った。

本県で最も古いといわれる須恵器は、現在のところ、中道町東山南（Ｂ）遺跡[8]が当てられている。同遺跡では２基の古墳が調査され、１号墳出土からは把手付き椀が、２号墳では樽型瓹が出土している。これらは、共にＴＫ216に相当し、さらには、１号墳が２号墳より古く位置づけられている。県内で須恵器瓹が出現するのは、ＴＫ216からで、以後、継続して出土している。

ＴＫ216では、東山南（Ｂ）遺跡２号墳（第３図　１）と、宮の下遺跡[9]（第３図　２）、伊勢町遺跡[10]（第３図　３）が相当する。東山南（Ｂ）遺跡２号墳と宮の下遺跡は樽型瓹を出土している。樽型瓹は、古式須恵器としてＴＫ23頃まで製作されているようで、古いほど両端と胴部の径に差がなくなるが、両遺跡出土の樽型瓹は、中央部が膨れた形状を呈しているため、この段階でも比較的新しく次の段階にかかるかもしれない。この他、現在整理中であるが、中道町朝日無名墳[11]からも樽型瓹が出土している。県内で、樽型瓹はこの３点のみで、すべてＴＫ216からＴＫ208に位置づけられている。宮の下遺跡出土のものは、耕作中の発見であるが、ほか２遺跡は古墳の周溝から破砕されて出土している。須恵器の甕と同様に墓前祭祀に使用されたものであろうか。伊勢町遺跡の瓹は、頸部から口縁部を欠いているが、この時期に相当するものであろう。

ＴＫ208 では、二之宮遺跡西46号（第３図　６）・西71号住居跡（第３図　４）、宇山平遺跡[12]（第３図　５）の須恵器瓹が、二之宮遺跡西71号住居跡（第３図　７）・中道町出土（第３図　８）の土師器瓹が相当する。この段階の特徴として、前段階まで細かった口頸基部が太くなる傾向をしめすようになる。ここで、ＴＫ208に組み込んだ須恵器瓹の３点は、二之宮遺跡出土のものが古く、宇山平遺跡のものがやや下るとおもわれる。後者は前者に比べ、口頸基部が太く、明瞭な段をもたないにしても、口縁部径が体部最大径と同じ位にひろがる。したがって、二之宮遺跡がＴＫ216に近い位置まで遡り、宇山平遺跡のものがそれに続くとおもわれる。金沢出土の土師器瓹は、細い口頸基部をもち体部高と口頸基部から口縁部の高さが２：１の割合である。このことは、二之宮遺跡のものにも見られる特徴で須恵器をよく模倣しているとおもわれる。

ＴＫ23では、柳坪遺跡Ａ地点[13]９号住居出土の須恵器瓹（第３図　９）と、姥塚遺跡５号溝・天神山古墳・二之宮遺跡遺構外の土師器瓹３点が相当する。この段階では、口頸基部が太く、口縁部径が体部最大径と等しいか、それに近くなる傾向を示す。柳坪遺跡Ａ地点から出土した須恵器瓹は、この時期の特徴をよく呈しており、相当する土師器瓹は、その特徴を誇示して作られたものとおもわれる。

ＴＫ47では、境川村馬乗山２号古墳[14]から出土した須恵器瓹である。外反する口縁部が段をなして端部へつづく器形に変化はないが、やや頸部が体部に比べ長くなる。実物を観察したことがないためはっきりはしないが、都塚の土師器瓹は、この段階に相当するのではないかと推定する。以上、最近発掘された遺物等を含め集成を兼ねながら編年を試みた。もともと、瓹は他の日常的な器種に比べ出土量が少ない。しかも、集落跡よりも古墳から出土することのほうが多いため、古墳の調査が少ない本県においては充分な結果とはなりえなかった。しかし、古墳から出土した瓹の大半が、破砕されて周溝内から検出されたことや、以外にも早い段階で、住居跡から出土するということか

ら、瓲のもつ意義や特殊性を考えさせられる結果となった。

5　おわりに

今回、須恵器模倣土器の先駆けともいえる瓲のみ、紹介をかね若干の考察を行ってみた。しかし、現段階では県内の資料を集成しただけに過ぎないため、今後、他県との資料比較・検討など、古墳時代中期後半の遺跡の検討、遺物の集成など多くの課題を残している。もともと資料が少ないうえに、明確な遺構からの出土例も少ないため不十分な点が多いが、今後の須恵器模倣土器を資料化する上で参考になればとおもう次第である。執筆にあたり、以下の方々にご指導・ご教示を頂いた。末筆ではあるが記して感謝する次第である。帝京大学文化財研究所　平野　修、豊富村教育委員会　岡野秀典、中道町教育委員会　林部　光、明野村教育委員会　佐野　隆、一宮町教育委員会　瀬田正明、甲西町教育委員会　広瀬和弘、山梨県立考古博物館　出月洋文、山梨県埋蔵文化財センター　末木　健・坂本美夫・長沢宏昌・森原明廣（敬称略・順不同）

註

1）末木　健・坂本美夫　1986　「山梨県」『古墳時代土器研究』　古墳時代土器研究会

2）坂本美夫　1987　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第23集『二之宮遺跡』　山梨県教育委員会

3）末木　健　1987　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第24集『姥塚遺跡　姥塚無名墳』　山梨県教育委員会

4）猪股喜彦・宮沢公雄・平野　修・櫛原功一　1990　『大原遺跡発掘調査概報』　一宮町教育委員会

5）中道町　1975　『中道町史』

6）一宮町　1967　『一宮町誌』

7）田辺昭三　1979　『須恵器大成』　角川書店

8）末木　健　1991　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第64集『東山南（B）遺跡』　山梨県教育委員会

9）岡野秀典　1993　「豊富村出土の樽型瓲」『山梨県考古学協会誌』第6号　山梨県考古学協会

10）甲府市　1989　「第1章　第4節　伊勢町遺跡」『甲府市史』

11）朝日無名墳は円墳で、2段構築の葺石をもっている。現在整理作業中にもかかわらず、担当者の温かい配慮により、紙面にのみ記載させていただいた。

12）岡野秀典　1993　豊富村埋蔵文化財調査報告第1集『高部宇山平遺跡』　豊富村教育委員会
なお、今回編年図に載せた実測図は、整理期間中にも係わらず、担当者の温かい配慮によって拝借した。

13）末木　健　1975　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内－』　山梨県教育委員会

14）坂本美夫・米田明訓　1985　山梨県埋蔵文化財センター調査報告第5集　『八乙女塚古墳（馬乗山1号・2号墳）・口開遺跡』　山梨県教育委員会